

平成 25 年度 第 1 回出水ツル分散化検討会 議事概要

日時：平成 25 年 11 月 27 日（水）14:30～17:00

場所：経済産業省別館 104 各省庁共用会議室

1．議題 1 これまでの取組について

(1) 環境省の分散化の取組について

平成 14 年度の提言の目標を 1000 羽程度とした理由について

- ・ IUCN の絶滅危惧種の基準（個体群サイズが 1000 羽未満）と、おおざっぱな考えだが絶滅回避のためには全個体数の一割程度が出水以外に必要なだろうと考えた。（金井）
- ・他に、出水での調査から 50～数百羽程度の群れであれば安定的な飛来が望まれると思われることから、あまり根拠はないが 50～数百羽程度の分散地を数か所作るとして 1000 羽程度が適当だろうという意見。（尾崎）

越冬ポテンシャル解析の試算条件が水田のみとなっているが、水田以外は飛来しないのか。

- ・越冬ポテンシャル解析では出水での生息環境を採用した。実際は水田以外も利用する。結果は最低限の数値の一例として捉えてほしい。（事務局）
- ・九州では近年大規模な人工湿地が作られてきているが、こうした場所を利用するならば、今後ツルの生息に配慮した整備が必要になるのではないか。（島谷）
- ・マナヅルは低湿地を好むが、ナベヅルは水田・畑地等比較的乾燥した環境を好む。湿地はねぐらとして利用する。（尾崎）
- ・日本、韓国では自然の湿地はほとんど残っていない。湿地がある韓国の洛東江（ラクトン川）付近ではマナヅルは越冬しているが、ナベヅルは中継地としての利用。保護事業が上手くいっている順天（スンチョン）湾では、採食は水田、ねぐらは広い干潟を利用している。出水でも昔は同じような状況だったらしい。ねぐらは干潟、河川の中州などが利用されている。（金井）
- ・出水は過去に整備が間に合わなかった時に渡来初期に河川でねぐらをとったことがある。ただし、そうした場所は人の攪乱があるので、長期的に安定したねぐらにはならない。（尾崎）
- ・ツルの保護は長期的にみると人とツルの関わり等文化的な視点が必要なのではないか。短期的な分散候補地としては干拓地だと思うが、長期的な視点で人とツルがどのように付き合っていくかを考えると干拓地以外も考える必要があると思う。（菊地）

(2) 世界と日本のナベヅル、マナヅルの状況について

繁殖地について

- ・中国南部は環境の悪化が懸念されるが、ツルの越冬地は保護されているのか。（島谷）
- ・ポーヤン湖は三峡ダムができたことにより湖の水位が下がってきている。今後のマナヅルへの影響が心配。（尾崎）
- ・中国の保護区は狩猟、採取の禁止だけで環境管理の対策はされていない。中国東北部では農業利用のため湿地へ流入する水量が減っている。西部のモンゴルの方では気候変動の影響が降雨量が減っていて、繁殖に影響していると報告されている。（金井）

(3) 出水市および分散候補地の現状について

少数越冬地ではなわばり争いによる追い払いが起きているが、出水ではなぜ起こらないのか。

- ・50羽位の群れが飛来すると追い払い切れなくなり、一時的になわばりを放棄し群れに混じる。別種だと許容性があり、ナベヅルとマナヅルではなわばりが重なることがある。(尾崎)

これまでなぜ分散が進まなかったのか

- ・給餌制限が行われなかった。周南市の個体数減少と出水の個体数増加は反比例しており、個体数の多い出水へ誘引されていることが原因と思われる。なわばりをもつ成鳥は再び周南市へ戻ってくるが、その子どもたちは翌年は出水に行ってしまう。出水で給餌制限を行わない限り、他地域で誘引しても難しいと思う。(尾崎)
- ・事業費の確保が難しかった。また、まだツルが飛来していない地域に分散候補地として名乗りを上げてもらうのは難しく、ツル誘致についての情報交換会の開催など情報提供したが分散候補地がなかなか見つからなかった。大規模飛来地を想定していたので、少数越冬地はあまり考慮していなかったことも原因。さらに当時は「ふゆみずたんぼ」のような農家との連携や生物多様性保全という考えがまだそれほど浸透していなかった。(金井)

給餌制限について

- ・ハクチョウは以前は各地で餌づけがされていたが鳥インフルエンザ発生を機に餌付けが行われなくなったところ、自然資源が利用できる場所に移動して生息できることが分かった。ツルで同じ取り組みを行うことは難しいかもしれないが、給餌量を減らすことは分散のきっかけになるのではないか。(呉地)
- ・ガンやハクチョウとツルの越冬地の違いとしては、冬作の有無がある。九州では冬は葉菜を作っているため、食害等の農業被害の問題がある。(金井)

その他

- ・ツルの生態や分散について分かっていること、まだ解明されていないことの整理が必要。事務局の方で、行動計画を作っていく過程で具体的なデータを整理し検討する機会を検討してほしい。(羽山)

2. 議題2 基本的考え方の項目案について

どのくらいのタイムスケールで考えているのか。(高見)

- ・現時点では決まっていないが、長期間かかると思われる。具体的な行動計画が決まることで見えてくると思っている。まずは短期的な目標を設定し、実現可能なところを目指し、その後中期目標、長期目標と段階を踏んで取り組んでいきたい。(環境省)

目的について

- ・ツルは日本の文化と関係が深い。単に絶滅回避だけでなく生物多様性を含めた文化的なことを入れなくていいのか。トキで経験したが、トキだけを守るといった目的にすると地域と対立してしまう。生物多様性の保全は皆に恩恵がある。環境全体を良くするためにトキがいる社会を作ろうと

という目的は分かりやすい。今回の目的案はシンプルだが、逆に事業を進めることが難しくなるのではないか。(島谷)

- ・ツルの保護だけでは地域の問題につながりにくく、地域振興や合意形成などの社会的な側面までカバーさせた目的にしないと後々立ち行かなくなる。基本原則に生物多様性が書かれているが、給餌をしている場合はツルと生物多様性を結びつけるのは難しい。(菊地)
- ・絶滅回避するための手段として越冬地分散が必要なのではないか。(呉地)
- ・最終的なゴールとしては、生物多様性等含めなければいけないと思っているが、優先的に実施すべき部分に目標をしぼり、当面は絶滅回避という目標を掲げたい。表現については検討したい。なお、絶滅回避のためには出水の数を減らすことが目的ではなくて、出水以外の場所に1000羽程度の群れ作ることが目的。(環境省)
- ・トキやコウノトリは、生息地を保全し条件が整ってから放鳥する手法で時間的に余裕がある。一方、ツルに関しては、今直面している危機をどう回避するかなので、まずは絶滅回避に対応する保護計画を立てる必要がある。しかし、受入れ側にとっては地域振興や生物多様性等が必要なもので、目的の中でその点は触れつつ、当面のゴールを明記する書き方がいいのではないか。(羽山)
- ・平成14年度の提言では絶滅の危険性および農業被害を減らすことが目的と明言されていて、分散候補地の現状においても感染症対策と農業被害対策が大きな柱となっている。(高見)
- ・種の絶滅回避を早急な目的と考えているため、農業被害は種にとって絶滅リスクではないので、必要性には入れてない。基本原則配慮事項には入れたいと考えている。(環境省)

必要性について

- ・ツル類で大量死しているのはヘルペスウイルス、鳥コレラ、その他ツルではないがボツリヌス等があるので、これらについても書くと良いと思う。(尾崎)
- ・ツル類の感染症のリストや感染リスク評価等、必要性として掲げるからには裏付けのデータが必要になる。(羽山)
- ・ツルが人為的な関与なしに自立することが究極の目的だと思うのでその点についても触れておく必要があるのではないか。(高見)
- ・分散の必要性についてこれまで保護をしてきた住民に理解を求める必要がある。受入れ候補地では本気でツルと共存する覚悟があるかどうかが大事。(出水市長)

目標について

- ・個体総数としてはマナヅルの方が少ない。また、韓国と日本の越冬地は行き来がかなりあると思われるので、実際は中国と韓国・日本の2つのグループに分かれ、絶滅の危惧がナベヅルより小さいとは言えない。前回の提言では、この点も考慮して両種を対象にしていた。今後新しい湿地が出来た場合、ナベヅルは難しいがマナヅルは飛来するという可能性も考えられるので、どちらも対象にした方が良いのではないか。(尾崎)
- ・ナベヅルの日本への集中の割合が高く感染症による絶滅リスクが高いので優先度をつけたが、ナベヅルだけにしぼることで逆に事業が進みにくくなるようなら検討したい。(環境省)
- ・個体数の確保の次は生息地の確保となると思うので、生息地の数についても書いておく必要があると思う。(呉地)

目標達成に向けた基本原則について

- ・空間的な管理の視野が必要。分散先の空間管理をどうするか。関係機関の連携、科学的で系統的な情報収集も必要になると思う。(島谷)
- ・絶滅回避が目的で、その種が人里に生息するから人との共存が必要。そうした視点で基本原則についていくつか考慮が書かれているが、ツルを象徴とした人と自然の共存についてもう少し明言した方が良いと思う。(菊地)
- ・出水市で有機農法や地元の産業とツルとの関係はあまり聞かない。文化的、社会的な側面から見直してほしい。それが他の地域への見本にもなる。(金井)

3. 議題3 本年度の取組について

- ・中国地方では調査の予定はないか?(周南市)
- ・中国地方では過去に複数回越冬が見られているのは周南市以外では出雲市のみ。昨年度実施した受け入れ調査では、出雲市は農業被害懸念の意見があったので今回は外した。(事務局)
- ・出水における羽数調査はどのような方法か。(尾崎)
- ・中学校の調査とは別に行う。ダブルカウントすることがないように韓国の羽数調査日と日程を合わせて実施する。特にマナヅルを対象に実施予定。(環境省)

(6) その他について

出水市から出水における鳥インフルエンザ対策の取組、国際シンポジウムの開催について、環境省より第2回の開催日について日程調整の案内をした。

以上